

Scramble Shot

Opera 満足度100点の公演、チューリヒ歌劇場《連隊の娘》

チューリヒ歌劇場によるドニゼッティ《連隊の娘》(演奏会形式)は、まれに見る「満足度100点」の公演だった。「演奏会形式で、未知のオペラを紹介したい」というアンドレアス・ホモキ総裁の視点と的確なキャスティングが功を奏した。

この公演で一番興味を惹かれていたのは、指揮のスペランツァ・スカップッチだったが、明確な細かい指示と闊達な棒さばきでフィルハーモニア・チューリヒに若い風を送り込んでいた。最初は腕が硬かったが、楽団員によると「初日はより硬さが残っていた」というので、その名残だろう。そのうち様々な表情を持つフレーズを提示しては、花開かせていった。不可解なのは各アリアの後奏だ。名人技な歌唱に興奮した熱も冷まずほど、音量も勢いもないのはなぜだろう。

第2の期待は、マリー役のサビース・ドゥヴィエルに寄せていた。小柄な容姿同様の小粒な声を超高音から低音まで、強弱も自由自在に操り、声で演技できる逸材だ。そして病欠のハビエル・カマレナの代役を務めたルネ・バルベラは驚きの発見だった。どの音域でも輝かしい色合いの声が超高音ではより輝き、常に微笑みをたたえながら、自然に歌ってしまう様は超人的だ。ピエトロ・スパニョーリも倍音の豊かな声でシュルピスを好演し、当歌劇場常連のリリアーナ・ニキテアースの候爵夫人もはまっていた。終幕では有名なスイス人コメディアンが特別出演し笑いを取っていたが、その必要もなかったほど幸福感に満ちていたのは、本物の才能を持つが故に余裕を見せられる、若いエネルギーが集結したからだろう(12月19日所見)。(中東生)



若い風を送り込んだ指揮のスカップッチ(左)とトニオ役のバルベラ(中)、マリー役のドゥヴィエル(右) ©T+T Fotografie-Toni Suter/OPERNHAUSE ZÜRICH

